様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４４１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ０２３３５

研究課題名（和文）大学における学習支援者の省察を通した能力開発

研究課題名（英文）Professional development using self-reflection for learning supporters in universities and colleges

研究代表者
清水　栄子（SHIMIZU, EIKO）

追手門学院大学・基盤教育機構・准教授

研究者番号：１０７６０２７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：大学教育の質保証が求められる中で、多様化する学生に対する学習支援の重要性は増し、複雑な対応を必要とされる学習支援を担う教職員（以下「学習支援者」という。）に対する専門家としての能力向上が求められている。本研究は、学習支援者による省察を通して、共通する考え方や行動基準をモデル化することで、学習支援者の能力開発を目指すものである。ワークショップ等を通じて学習支援者のためのポートフォリオの記載項目について提案した。また、学習支援の場面や状況をQ&A形式でまとめたハンドブック『大学の学習支援Q&A』を作成した（2022年6月末刊行予定）。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学習支援の実践において面談などの個別的な学生対応を行う場面は少なくない。そのため、学習支援者は各々の経験をもとにした学生対応を行っている。経験から得られた知識や方法について共有する機会、学習支援に特化した能力開発の機会は多くはない。本研究の社会的意義として、以下の3点が挙げられる。学習支援者による実践の省察を通じて、(1)学習支援の実践のモデル化をはかり、共有するためのハンドブックを作成したこと、(2)学習支援者に特化したポートフォリオの記載項目を提案したこと、これらの過程において（3）ワークショップ等の学習支援者を対象とした能力開発を試行したことである。

研究成果の概要（英文）：Against the background of the growing emphasis on quality assurance in higher education in recent years, professional development for faculty and staff who take on the responsibility of supporting an ever more diverse student body is increasingly important. These staff and faculty (hereafter called “learning supporters”) need to provide detailed and complex support for each student, so they should develop their abilities as professionals.
Through examining reflection by these learning supporters, this research aims to find common attitudes and codes of behavior. Based on the research, items of description for a learning supporter’s portfolio are suggested. A handbook in Q&A format for learning supporters, which collected the cases of learning supporters, has been created and will be published in the end of June, 2022.

研究分野：高等教育

キーワード：学習支援　省察　能力開発　学習支援者　ハンドブック　ポートフォリオ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

多様な学生を受け入れる高等教育において、個々の学生の課題に沿った対応が求められる学習支援の重要性は増している。学習支援者は、さまざまな場面において、その長短に関わらず各々の経験をもとに、個々の学生の課題やニーズに沿った対応を行っている。このような状況において、学習支援者には、質を担保した教育を提供することに加え、“専門家”としての能力開発が求められている。ショーン（2015）は、新たな専門家像として反省的実践家について言及している。新たな専門家は、クライアントの抱える複雑な問題に対して、これまで蓄積された複雑で複合的な問題に「状況との対話」をとおして「行為の中の省察」を行い、問題に対処し、クライアントに寄り添っている。学習支援者も新たな専門家と考えられる。

効果的な省察を促進するために重要なのが、省察のプロセスにおいて専門家に投げかける「問い（質問）」である。これまでに様々な省察モデルが提唱されている。たとえば日本では、教師教育において、対話的プロセスの中で省察を行う ALCT モデル（Korthagen,1985）、看護教育においては思考のみならず行動レベルまでの振り返りを行うリフレクティブサイクル（Kolb,1988）がある。

米国においては、専門職団体による研究成果の提供が行われている。そのひとつに省察を介した能力開発に「独自の実践理論（Personal Practical Theories：PPTs）」（Clandinin, 1986）がある。アカデミック・アドバイジングの専門職団体 NACADA は、アドバイザーを反省的実践家に導くための能力開発として PPTs を紹介している。PPTs はアドバイザーによる実践の振り返りと確認によって、独自の助言アプローチや理論を見つけ出すことができるため、アカデミック・アドバイジングの質を高めている（Hutson, Bloom, & He, 2009）。また、学生支援の専門職団体である全国学生担当管理職員協会（NASPA）とアメリカ大学学生担当者協会（ACPA）によって、すぐれた学生支援の基本的方針の提示や実践方法の例示として７つの「実践の原則」を提示されている。

以上のように、実践に関する省察は専門家の能力向上に役立っていることは明らかである。しかし、省察の質を高めるための質問方法や枠組みはまだ明らかにされてはいない。とくに日本の大学に関する研究蓄積はほとんどない状況である。本研究はアメリカや国内の実践事例をそのまま日本の学習支援者の能力開発に応用しようとするものではない。本研究の中心的な問いは「学習支援者の質を高めるために、効果のある省察を通した能力開発はどのようなものなのか」という点である。

本研究の着想に至った背景には、これまで行ってきた研究と実践がある。研究代表者らは FD・SD に関する研究を行ってきたが、授業や職員の分担業務を対象とした個別的な研究に留まっており、教職協働により実践されている教職員に共通する分野の研究には至っていない。正課および正課外教育に関わる学習支援は、より広い視点に立った教育的な役割を担うようになっている。学習支援者として教員だけでなく、職員の積極的な参入もあり、両者の力量が問われ、人財の能力開発研究はさらに必要とされている。SD の義務化を背景にして、教職員が共通して関わる学習支援を研究対象とし、支援者の振り返りを通じて共通する要素を抽出し、体系化することは、学習支援の重要性から必要とされる課題だという考えに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、学習支援者の質を高めるために、効果のある省察を通した能力開発を提案することにある。具体的には、学習支援の実践に関する学習支援者自身の省察を通して、学生対応に対する考え方や実践での行動のモデル化とそのモデルを用いた能力開発としてハンドブックを作成し、それを用いた研修の実施である。

３．研究の方法

上述の目的を遂行するために、以下の 3 つの方法を組み合わせ、最適の結果が得られるように努めた。

(1) 文献・資料の分析

国内外の学習支援の実践、学習支援者の担う役割と能力開発に関する国内外の論文・文献を入手し、これをもとに学習支援の現状と課題、学習支援者の担う役割、能力開発の実情について分析を試みた。

(2) 国内外の大学関係者や学習支援者へのヒアリング

文献・資料の分析では得にくい具体的な実践や分析によって得られた学習支援に関する現状や課題について確認を行うために、国内外の学習支援者や管理職、専門職団体関係者へのヒアリングである。国内では大学教育学会等でのラウンドテーブル、アカデミック・アドバイジング・サロンの企画・実施、NACADA 年次大会への参加により、学習支援者や管理職、研究者等との情報交換に努めた。

(3) 能力開発プログラムの開発と試行

文献・資料の分析および有識者からのヒアリングによって得られた知見から、学習支援者を対

象とする能力開発プログラムと学習支援者用のハンドブックを作成した。能力開発プログラムとして学習支援ポートフォリオ作成ワークショップを試行し、参加者を対象としたヒアリングやアンケート調査によって、学習支援の現状に関わる情報収集とともにポートフォリオの改善に努めた。学生対応に対する学習支援者に共通する考え方や行動のモデル化から、学習支援の場面や状況を設定したハンドブックを作成した。ハンドブックへの学習支援者や研究者からのフィードバックを基に改良を加えた。

４．研究成果

本研究の主たる成果として、以下の 3 点が挙げられる。

(1)日本における学習支援の現状と課題

学習支援の対象とする範囲は広く、全体を把握することは難しい。また他大学の実践状況や課題等を共有する機会は多くはない。学習支援の現状と課題を明らかにするために、参加者による協議や意見交換する場を設定した。大学教育学会でのラウンドテーブル、大学教育研究フォーラムの企画者セッション、アカデミック・アドバイジング・サロンの企画・実施である。事例として愛媛大学、金沢大学、昭和女子大学、創価大学、明星大学、立命館大学、テンプル大学ジャパンキャンパスでの取り組みについて関係者に発表してもらった。その後、具体的な支援内容、学習支援者としての教員・職員・専門職それぞれの役割や能力開発、組織体制など、日本における学習支援の現状と課題について意見交換を行った。ラウンドテーブルの議論では、特に学習支援者の能力開発に関して、以下の 3 点について明らかとなった。(1) 学生への個別的な対応には専門的な知識・スキルが求められていること、(2)それぞれの大学での業務に必要な知識・スキルは、予め提示され、事前研修や勤務に際してのルールも示されていること、(3)知識・スキルを向上させるための専門的な研修制度は確立されてはおらず、学習支援者が備えている知識・スキルに依存していることである。また職員の担う役割は大きく、人事異動を前提とした業務の継承性についての課題も指摘された。人事異動を前提とした業務の継承性の工夫が求められている。これに対して、担当者の知識・スキルの向上のための研修や情報提供あるいは担当者同士のネットワークの強化等を担う米国における専門職団体のような存在の必要性が望まれている（清水ほか，2019）。アカデミック・アドバイジング・サロンでは，学習支援では学習だけでなくキャリアや生活支援などに関わること、そのためにも学習支援者の知識・スキルの向上や他部署との連携の必要性について議論された。大学教育研究フォーラムでは、教員、専門職に加えて学生による支援の状況について紹介された。これらの議論から得られた日本における学習支援者に対する能力開発の現状と課題について国際学会（NACADA）で発表した。

(2)学習支援者ハンドブックの作成

本研究で得られた知見をもとに、学習支援者のためのハンドブックを作成した。学習支援者の共通性を担保できるように、申請者および研究協力者間での相互フィードバックに加えて、学習支援に携わっている学習支援者や研究者から得られたフィードバックを参考にした。学習支援の経験が浅い学習支援者にもわかりやすいように具体的な場面や状況別に設定した。ハンドブックは、読み物としてだけでなく、ケースを考える能力開発の場面などでの活用を想定し、構成を検討した。その結果以下のような 3 部構成とし、具体的な状況場面での学生対応について、学習支援者間で意見交換ができるよう工夫した。学習支援を行ううえで最も利用されている面談を中心に 3 部構成でまとめた。第 1 部では、学習支援において学習支援者が大切にすべき指針や面談の標準的な進め方などの基本的な原理と方法を示した。第 2 部は、学習支援の実践的な方法のなかでも特に広く活用できると考えられるものを場面やテーマ別にまとめた。具体的には、面談の基本、特定の状況における面談、学生の課題に応じた支援、多様な学生への支援、学生相互による支援・関係機関・関係者との連携、学習支援者の倫理、学習支援者の能力開発・専門組織の運営である。第 3 部の資料編では、学習支援の実践で活用できるシートやアンケートなどである。これは『大学の学習支援 Q&A』（玉川大学出版部）として、2022 年 6 月末に刊行予定である。

（3）学習支援ポートフォリオの提案

次に学習支援者の省察を基にしたポートフォリオについてである。省察を用いた能力開発に「独自の実践理論（PPTs）」では、優れたアドバイザーの特徴について自身の信念を内省的に促していく。これにより、アドバイザーの専門的なアイデンティティを促す信念、倫理、独自の実践について導き出す。これを発展させたのがアカデミック・アドバイジング・ポートフォリオである。ポートフォリオは、自己啓発のために利用される形成的ポートフォリオや特定分野の習得度を示す総括的ポートフォリオなどがある。能力開発だけでなく、昇進・昇格の申請に用いられる場合もある。ポートフォリオの作成にあたっては、アドバイジングの専門家として自身のアドバイジング活動やその成果をふりかえることで、これらの業務や改善点、目標が明確化できるため、アカデミック・アドバイザーの能力開発の手段として期待されており（Vowel and Wallet-Oritiz, 2003）、ポートフォリオは毎年更新されている。NACADA では、アドバイジングでの困難な状況にどのように対処したかを共有し、対処方法だけでなく行動の理論的根拠を説明することによって能力開発を行っている。

米国でのアカデミック・アドバイジング・ポートフォリオについて文献調査のほかに

NACADA のプレワークショップに参加し、その記載項目や作成方法について情報収集を行った。米国ではオンラインを活用した e ポートフォリオが主流のようであった。日本において既に導入されているティーチング・ポートフォリオ、スタッフ・ポートフォリオの作成項目等も参考にし、学習支援ポートフォリオの記載項目を検討した。ワークショップを対面で 1 回、オンラインで 2 回実施した。参加者からのフィードバックとして、「学習支援者の支援範囲は広く、記載項目を限定するのは難しいのではないか。」「学習支援者の立場も、専任職員、管理職、専門職などさまざまであり、作成目標によって必要とされる記載項目は異なるのではないか」などという意見が寄せられた。これらを踏まえて、学習支援ポートフォリオの記載項目として、「学習支援に対する理念」「学習支援の実績記録」「主な学習支援実績の要約」「学習支援にかかわる能力開発」「学習支援のために作成した資料や教材」「学習支援に関わる今後の目標」を提案した。

【参考文献】

Clandinin, D. J. (1986). Classroom practice. London: Falmer.

Gibbs, G. (1988). Learning by Doing: A Guide to Teaching and Learning Methods. Oxford : Oxford Further Education Unit

Hutson, B.L., Bloom, J.L., & He, Y. (2009, December). Reflection in advising. Academic Advising Today, 32(4). Retrieved from https://nacada.ksu.edu/Resources/Academic-Advising-Today/View-Articles/Reflection-in-Advising.aspx, 2022 年 6 月 17 日

Korthagen, F. A. J. （1985） Reflective teaching and preservice teacher education in Netherlands. Jounal of Teacher Education, 9 (3)， p317-326.

ドナルド・ショーン（2015）『専門家の知恵』ゆるみ出版

清水栄子・山崎めぐみ・御厨まり子・岸岡奈津子・秦敬治（2020）「日本におけるアカデミッ・アドバイジングを追究する－効果的な組織運営について－」大学教育学会誌第 41 巻 2 号, pp. 76-80.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計21件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 中井俊樹	４．巻 令和3年2月24日号
２．論文標題 面談を通した学習支援	５．発行年 2021年
３．雑誌名 教育学術新聞	６．最初と最後の頁 1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 横山卓哉・東南隆光・山崎その	４．巻 16
２．論文標題 オンライン化推進による京都外国語大学の国際交流	５．発行年 2020年
３．雑誌名 大学マネジメント	６．最初と最後の頁 16-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 清水栄子、山崎めぐみ、御厨まり子、岸岡奈津子、秦敬治	４．巻 41(2)
２．論文標題 （ラウンドテーブル報告）日本におけるアカデミック・アドバイジングを追究するー効果的な組織運営についてー	５．発行年 2020年
３．雑誌名 大学教育学会誌	６．最初と最後の頁 76-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 清水栄子	４．巻 17
２．論文標題 学習支援者対象研修プログラムの開発と実践――学習支援者による省察に着目して――	５．発行年 2020年
３．雑誌名 徳島大学　大学教育研究ジャーナル	６．最初と最後の頁 22-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中井俊樹	４．巻 令和元年5月22日号
２．論文標題 大学教員の教育活動における倫理とは	５．発行年 2019年
３．雑誌名 教育学術新聞	６．最初と最後の頁 1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中井俊樹	４．巻 2019年6月号
２．論文標題 能力開発による教員の支援と教育の質向上	５．発行年 2019年
３．雑誌名 月刊愛媛ジャーナル	６．最初と最後の頁 78-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中井 俊樹	４．巻 603
２．論文標題 初期キャリア教員の教育支援	５．発行年 2018年
３．雑誌名 IDE現代の高等教育	６．最初と最後の頁 39-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山﨑その	４．巻 22
２．論文標題 「小規模大学のＩＲに関するマネジメント―管理職の立場から―」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 大学行政管理学会誌	６．最初と最後の頁 66-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石田明菜・長谷川祥子・岸岡奈津子	４．巻 18
２．論文標題 Student Success Program における支援の現状と課題	５．発行年 2019年
３．雑誌名 立命館高等教育研究	６．最初と最後の頁 75-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 清水栄子・山﨑めぐみ・御厨まり子・島田敬久	４．巻 40(2)
２．論文標題 アカデミック・アドバイジング　実践者に対する能力開発の観点から	５．発行年 2019年
３．雑誌名 大学教育学会誌	６．最初と最後の頁 103-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 清水栄子	４．巻 2838
２．論文標題 スチューデント・サクセスを促進させるアカデミック・アドバイジング	５．発行年 2021年
３．雑誌名 教育学術新聞	６．最初と最後の頁 3-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 原裕美・山﨑その・各務正・中原正樹・木村弘志	４．巻 30
２．論文標題 大学の自律性に関する指標の検討：国際比較から得られる日本への示唆	５．発行年 2022年
３．雑誌名 大學教育研究	６．最初と最後の頁 129-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計32件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 田上正範・清水栄子
２．発表標題 正課併行型の学生主体活動から学生の成長を促進する要因分析
３．学会等名 大学教育学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 木原　宏子・岸岡　奈津子・石田　明菜・渡邉　あい子
２．発表標題 "Student Successを実現するための伴走支援の在り方に関する一考察 -立命館大学Student Success Program個別支援の事例から-"
３．学会等名 大学教育学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Eiko Shimizu, Natsuko Kishioka, Megumi Yamasaki, Mariko Mikuriya
２．発表標題 Development and Practice of Training Program in Japanese Higher Education
３．学会等名 NACADA 2020 Virtual Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 清水栄子・岸岡奈津子
２．発表標題 学習支援者のためのポートフォリオ開発
３．学会等名 大学教育研究フォーラム
４．発表年 2021年

１．発表者名 清水栄子
２．発表標題 追手門学院大学ライティングセンターの取り組みー学生チューターによる支援活動ー
３．学会等名 大学教育研究フォーラム
４．発表年 2021年

１．発表者名 木原宏子・茅根未央・岸岡奈津子・石田明菜・松本清・渡邉あい子
２．発表標題 Student Successを促すオンラインでの学修支援
３．学会等名 大学教育研究フォーラム
４．発表年 2021年

１．発表者名 清水栄子、岸岡奈津子
２．発表標題 自己省察を用いた学習支援担当者の能力開発の可能性―CAS Self-Assessment Guideに着目して―
３．学会等名 大学教育学会第41回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 清水栄子、秦敬治、山﨑めぐみ、岸岡奈津子、御厨まり子、島田敬久
２．発表標題 ラウンドテーブル　日本におけるアカデミック・アドバイジングを追究する ～効果的な組織運営について～
３．学会等名 大学教育学会第41回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 竹中喜一、中井俊樹
２．発表標題 日本の大学における学習成果の評価方針の類型化
３．学会等名 大学教育学会課題研究集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 服部律子、小林忠資、中井俊樹
２．発表標題 アクティブラーニングのしくみづくり
３．学会等名 日本看護学教育学会第29回学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山﨑その
２．発表標題 大学職員の役割について
３．学会等名 日本私立学校振興・共催事業団 令和元年度　私学スタッフセミナー（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 岸岡奈津子
２．発表標題 専門職の立場からー立命館大学Student Success Program（SSP） 実践事例を通してー
３．学会等名 大学教育学会第41回大会ラウンドテーブル
４．発表年 2019年

１．発表者名 木原宏子、岸岡奈津子、渡邉あい子、石田明菜、下井康弘
２．発表標題 正課と課外自主活動の両立困難学生に対する支援―立命館大学 新「学業ガイドライン」抵触者に対する学生支援(SSP)の事例から―
３．学会等名 初年次教育学会第12回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 石田明菜、岸岡奈津子、渡邉あい子、木原宏子、辻田奈保子、平野莉江子、五坪智彰
２．発表標題 学生の「自立と成長」を目指した階層的学修支援 ―立命館大学Student Success Program揺籃期の総括と今後の課題―
３．学会等名 大学教育研究フォーラム
４．発表年 2019年

１．発表者名 長田勝・長谷川祥子・加藤慶彦・柳瀬圭志・下井康弘・渡邉あい子・石田明菜・岸岡奈津子
２．発表標題 主体的な学生を育成するための学修支援 ―立命館大学におけるStudent Success Programの取組―
３．学会等名 大学教育研究フォーラム
４．発表年 2019年

１．発表者名 岸岡奈津子・藤本祥之・秦敬治
２．発表標題 ピアレビューによる教育効果・改善に関する考察 ―全教員を対象とした大学の事例をもとに―
３．学会等名 大学教育学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 渡邉あい子・石田明菜・岸岡奈津子・長田勝
２．発表標題 SSP（Student Success Program）による入学前後の継続的な正課・課外の両立支援
３．学会等名 初年次教育学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 清水栄子
２．発表標題 学生エンゲージメントと自立を促す支援としかけ～アカデミック・アドバイジングの場合～
３．学会等名 第24回FDフォーラム（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 清水栄子・ 岸岡奈津子・山﨑その・井原奉明・竹中喜一・井上咲希・中野正俊・中井俊樹
２．発表標題 学習支援担当者の能力開発の現状と課題―教員・学生・専門職を事例として―
３．学会等名 第25回大学教育研究フォーラム参加者企画者セッション
４．発表年 2019年

１．発表者名 清水栄子・山﨑めぐみ・御厨まり子・島田敬久・岸岡奈津子・秦敬冶
２．発表標題 ラウンドテーブル　アカデミック・アドバイジング－実践者の能力開発の観点から－
３．学会等名 大学教育学会第40回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 清水栄子・山﨑その・岸岡奈津子・中井俊樹
２．発表標題 学習支援担当者に求められる能力・スキルとは －米国専門職団体を事例として－
３．学会等名 四国地区大学教職員能力開発ネットワークSPODフォーラム2018
４．発表年 2018年

１．発表者名 竹中喜一・上畠洋祐・清水栄子・中井俊樹
２．発表標題 日本の大学におけるStaff Developmentの論点と課題
３．学会等名 四国地区大学教職員能力開発ネットワークSPODフォーラム2018
４．発表年 2018年

１．発表者名 清水栄子
２．発表標題 Current Situation and Challenges on Academic Advising in Japan
３．学会等名 千葉大学アカデミック・リンク・センタークローズドセッション
４．発表年 2018年

１．発表者名 Megumi Yamasaki, Mariko Mikuriya, Eiko Shimizu, and Natsuko Kishioka
２．発表標題 Promoting Engaged learning& Student’s Identity Via Academic Advising Function
３．学会等名 NACADA International Conference (on Line)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 木原宏子・岸岡奈津子・細川千絵
２．発表標題 学力補完型から目標設定型へシフトした入学前教育の効果ー文化芸術・スポーツ特別選抜入試合格者を対象としてー
３．学会等名 初年次教育学会第14回大会（オンライン開催）
４．発表年 2021年

１．発表者名 渡邉あい子・石田明菜・岸岡奈津子
２．発表標題 支援の可視化と最適化ー多様なニーズを取りこぼさないリファーとStudent Successの共通理解ー
３．学会等名 日本アカデミック・アドバイジング協会第1回年次大会（オンライン開催）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計7件

１．著者名 竹中喜一、中井俊樹編	４．発行年 2021年
２．出版社 玉川大学出版部	５．総ページ数 208
３．書名 大学SD講座４ 大学職員の能力開発	

１．著者名 中井俊樹、宮林常崇編	４．発行年 2019年
２．出版社 玉川大学出版部	５．総ページ数 208
３．書名 大学SD講座 3　大学業務の実践方法	

１．著者名 中井俊樹編	４．発行年 2019年
２．出版社 玉川大学出版部	５．総ページ数 196
３．書名 大学SD講座１　大学の組織と運営	

１．著者名 中井 俊樹	４．発行年 2018年
２．出版社 医学書院	５．総ページ数 180
３．書名 アクティブラーニングの活用	

１．著者名 中井俊樹編著（清水栄子:分担執筆　3章，11章）	４．発行年 2021年
２．出版社 玉川大学出版部	５．総ページ数 216（3章10ページ，11章10ページ）
３．書名 大学SD講座２　大学教育と学生支援	

１．著者名 清水栄子・中井俊樹編	４．発行年 2022年
２．出版社 玉川大学出版部	５．総ページ数 178
３．書名 大学の学習支援Q&A	

１．著者名 中井俊樹・小林忠資編	４．発行年 2022年
２．出版社 医学書院	５．総ページ数 160
３．書名 看護のための教育学第2版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中井　俊樹 (NAKAI Toshiki) (30303598)	愛媛大学・教育・学生支援機構・教授 (16301)	
研究分担者	山崎　その (YAMASAKI Sono) (70449502)	京都外国語大学・図書館・事務長 (34302)	
研究分担者	岸岡　奈津子 (KISHIOKA Natsuko) (30757927)	立命館大学・学生部・OIC学生オフィス・職員 (34315)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	山崎　めぐみ (YAMASAKI Megumi)	創価大学 (32690)	
研究協力者	御厨　まり子 (MIKURIYA Mariko)	明星大学 (32685)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	竹中　喜一 (TAKENAKA Yoshikazu)	愛媛大学 (16301)	
研究協力者	小林　忠資 (KOBAYASHI Tadashi)	岡山理科大学 (35302)	
研究協力者	上月　翔太 (KOZUKI Shota)	愛媛大学 (16301)	
研究協力者	岸岡　洋介 (KISHIOKA Yosuke)	京都外国語大学 (34302)	
研究協力者	河崎　十星子 (KAWASAKI Toseko)	立命館大学 (34315)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関